

春の潮

伊藤左千夫

青空文庫

一

隣の家から嫁の荷物が運び返されて三日目だ。省作は養子にいった家を出てのつそり戻つてきた。婚礼をしてまだ三月と十日ばかりにしかない。省作も何となし気が咎めてか、浮かない顔をして、わが家の門をくぐったのである。

家の人たちは山林の下刈りにいったとかで、母が一人大きな家に留守居していた。日あたりのよい奥のえん側に、居睡りもしないで一心にほぐしものをやっていられる。省作は表口からは上がらないで、内庭からすぐに母のいるえん先へまわった。

「おツ母さん、追い出されてきました」

省作は笑いながらそういつて、えん側へ上がる。母は手の物を置いて、眼鏡越しに省作の顔を視つめながら、

「そらまあ……」

驚いた母はすぐにあとのことばが出ぬらしい。省作はかえって、母に逢ったら元気づいた。これで見ると、省作も出てくるまでには、いくばくの煩悶をしらしい。

「おツ母さん、着物はどこです、わたしの着物は」

省作は立つたまま座敷の中をうろうろ歩いてる。

「おれが今見てあげるけど、お前なにか着替も持って来なかったかい」

「そうさ、また男が風呂敷包ふろしきづつみなんか持って歩けますかい」

「困ったなあ」

省作は出してもらった着物を引つ掛け、兵児帯へこおびのぐるぐる巻きで、そこへそのまま寝転ねころぶ。母は省作の脱いだやつを衣紋竹えもんだけにかける。

「おツ母さん、茶でも入れべい。とんだことした、菓子買ってくればよかった」

「お前、茶どころではないよ」

と言いながら母は省作の近くに坐すわる。

「お前まあよく話して聞かせろま、どうやって出てきたのさ。お前にこにこ笑いなどして、ほんとに笑いごつちやねいじやねいか」

母に叱しかられて省作もねころんではいられない。

「おツ母さんに心配かけてすまねいけど、おツ母さん、とてもしうがねんですよ。あんだっていやにあてこすりばかり言つて、つまらん事にも目口めくちを立てて小言こごとを言うんです。

近頃はあいつまでが時々いやなそぶりをするんです。わたしもう癪しやくさわに障さわっちゃったから」

「困ったなあ、だれが一番悪くあたるかい。おつねも何とか言うのかい」

「女親です、女親がそりやひどいことを言うんです。つねのやつは何とも口には言わないけれど、この頃失敬なふうをすることがあるんです。おッ母さん、わたしもう何がなんでもいやだ」

「おッ母さんもね、内々ないない心配していただよ。ひどいことを言うって、どんなこと言うのかい。それで男親は悪い顔もしないかい」

「どんなことって、ばかばかしいことです。おとっさんの方は別に悪くもしないです」

「ウムそれではひどいこっちはおとよさんの事かい、ウム」

「はあ」

「ほんとに困った人だよ。実はお前がよくないんだ。それでは全く知れっちまたんだな。おッ母さんはそればかり心配でなんなかつただ。どうせいつか知れずにはいないけど、少しなずんから知れてくれればどうにか治まりがつくべいと思ってたに、今知れてみると向うで厭いやけ気がさすのも無理はない」

母はこういつてしばらく口を閉じ、深く考えつつ溜ためいき息をつく。暢のんき気そうに、笑い顔し

ている省作をつくづくと視^みつめて、老いの眼に心痛の色が溢^{あふ}れるのである。やがてまた思いに堪^たえないふうに、

「お前はそんな暢気な顔をしていて、この年寄の心配を知らないのか」

そういわれて省作は俄^{にわ}かに居ずまいを直した。そうして、

「おッ母さん、わたしだってそんなに暢気でいやしませんよ。年寄にそう心配さしちやすまないですが、実はおッ母さん、あの家はむこうで置いてくれてもわたしの方でいやなんです。なんのかんの言^いったって、わたしがいる気で少し気をつければ、わけはないですけど、なんだか知らんが、わたしの方で厭^{いや}になっちまったんでさ。それだからおッ母さん心配しないでください」

これは省作の今の心の事実であるが、省作の考えでは、こういつたら母の心配をいくらかなだめられると思うたのである。ところがそう聞いて母の顔はいよいよむずかしくなつた。老いの眼はもう涙に潤^{うるお}つてゐる。母はずつと省作にすり寄つて、

「省作、そりやおまえほんとかい。それではお前、あんまり我^{わがまま}儘というもんだ。おッ

母さんはただあの事が深田へ知れては、お前も居づらいはずだと思ふたに、今の話ではお前の方から厭になつたというのだね。それではおまえどこが厭で深田にいられない、深田

の家のどこところが気に入らないかえ。おつねさんだつて初めからお互いに知り合つて
る間柄だし、おつねさんが厭いやなわけはあるまい。その年をしてただわけもなく厭いやになつた
などというのは、それは全く我儘わがままというものだ。少しは考えてもみろ」

省作はだまつてうつむいている。省作は全く何がなし厭いやになつたが事実で、ここがこう
と明瞭めいりょうに意識した点はない。深田の家に別に気に入らないところがあるのでは
ない。つまるところ省作の頭には、おとよの事が深く深く染みこんでいるから、わけもな
く深田に気乗りがしない。それにこの頃おとよと隣との関係も話のきまりが着いて、いよ
いよおとよも他ほかに關係のない人となつてみると、省作はなにもかにもばからしくなつて、
俄にわかに思いついたごとく深田にいるのが厭いやになつてしまった。しかしそれをそうと打ぶつ
けに母にも言えないから、母に問い詰められてうまく返答ができない。口下手くちべたな省作には
もちろん間に合わせことばは出ないから、黙つてしまった。母も省作のおちつかぬはおと
よゆえと承知はしているが、わざとその点を避けて遠攻めをやつてゐる。省作がおつねにな
ずみさえすれば、おとよの事は自然忘れるであらうと思ひこんで、母はただ省作を深田の
方へやつて置きたいのだ。

「お前も知つてのとおり深田はおら家うちなどよりか身しんしゅう上もずっとよいし、それで旧家で

はあるし、おつねさんだって、あのとおり十人並み以上な娘じゃないか。女親が少しむずかしやだという評判だけど、そのむずかしいという人がたいへんお前を気に入ってたつての懇望こんもうでできた縁談だもの、いられるもいられないもないはずだ。人はみんな省作さんは仕合せだ仕合せだと言ってる、何が不足で厭になったというのかい。我儘いうもほどがある、親の苦勞も知らないで……。お前は深田にいさえすれば仕合せなのだ。おツ母さんまで安心ができるのだに。こういう氣かいお前は、いつまでこの年寄に苦勞をかける氣か」

母は自分で思いをつめて鼻をつまらせた。省作は子供の時から、随分母に苦勞をかけたのである。省作が永く眼めを煩わづらった時などには、母は不動尊に塩物しおもの断ちの心願しんがんまでして心配したのだ。ことに父なきあとの一人の母ひとり、それだから省作はもう母にかけてはばかに氣が弱い。のみならず省作は天性あまり強く我がを張る質たちでない。今母にこう言いつめられると、それでは自分が少し無理かしらと思うような男であるのだ。

「おツ母さんに苦勞ばかりさせて済まないです。なるほどわたしの我儘に違いないでしょう、けれどもおツ母さん、わたしの仕合せ不仕合せは、深田にいないに關係はないでしょう。あの家にいても、面白くなくては、やっぱり不仕合せですからねイ。またよしあそこを出たにしろ、別に面白く暮す工夫くふうがつけば、仕合せは同じでありますか。それ

でもあの家にいさえすればわたしの仕合せ、おツ母さんもそれで安心だと思ふなら考えなおしてみてもいいけれど、もうこうなつちやつては仕方がありませんか」

母は少し省作を睨にらむように見て、

「別に面白く暮す工夫で、お前どんな工夫があるかえ。お前心得違いをしてはならないよ。深田にいさえすればどうもこうも心配はいらないじゃないか。厭いやと思うのも心のとりよう一つじゃねいか。それでお前は今日きょうどういつて出てきました」

「別にむずかしいこと言やしません。家へいつてちよつと持つてくるものがあるからつて、あやつにそう言つて来たまでです」

「そうか、そんなら仔細しさいはないじゃないか。おらまたお前が追い出されて来ましたというから、物言いでもしてきた事と思つたのだ。そんなら仔細はない、今夜にも歸つてくる。お前の心さえとりなおせば向うではきつと仔細はないのだよ。なあ省作、今お前に戻つてこられるとそつちここに面倒が多い事は、お前も重じゆうじゆう々承知してるじゃないか」

省作はまただまつてる。母もしばらく口をあかない。省作はようやく口重く、

「おツ母さんがそれほど言うなら、とにかく明日あすは歸つてみようけれど、なんだかわたしの氣が変になつて、厭な心持ちでいたんだから、それで向うでも少し氣まづくなつたわけ

だとすると、わたしは心を取りなおしたにしろ、向うで心をなおしてくんねば、しょうがないでしょう」

「そりやおまえ、そんな事はないよ。もともと懇望されていったお前だもの、お前がその気になりさえすりや、わけなしだわ」

話は随分長かったが、要するに覚束おぼつかない結局に陥ったのである。これからどうしてもおとよの話に移る順序であれど、日影はいつしかえん側をかぎって、表の障子をがたびちさせいつさんに奥へ二人の子供が飛びこんできた。

「おばあさんただいま」

「おばあさんただいま」

顔も手も墨だらけな、八つと七つとの重蔵しげぞう松三郎が重なりあつてお辞儀じぎをする。二人は起たちさまに同じように帽子をほうりつけて、

「おばあさん、一銭おくれ」

「おばあさん、おれにも」

二人は肩をおばあさんにこすりつけてせがむのである。

「さあ、おじさんが今日はお菓子を買ってやるから、二人で買ってきてくれ、お前らに半

分やる」

二童^{ふたり}は錢を握つて表へ飛び出る。省作は茶でも入れべいと起^たつた。

二

翌朝、省作はともかくも深田に歸つた。歸つたけれども駄^だ目であつた。五日ばかりしてまた省作は戻つてきた。今度はこれきりというつもりで、朝早く人顔の見えないうちに、深田の家を出たのである。

母は折^せ角^{かく}言^いうていったんは歸したもの、初めから危ぶんでいたのだから、再び出てきたのを見ては、もうあきらめて深く小言^{こごと}も言^いわ^ない。兄はただ、

「しようがないやつだなあ」

こう一^{ひと}言^{こと}言^いつたきり、相変らず夜は繩をない昼は山刈りと土肥作りとに側目^{わきめ}も振らない。弟を深田へ縁づけたということをたいへん見栄^{みえ}に思つてた嫂^{あによめ}は、省作の無分別をひたすら口惜^{くや}しがっている。

「省作、お前あの家にいないということがあ^あるもんか」

何べん繰り返したかしかない。頃は旧暦の二月、田舎では年中最も手すきな時だ。問題に興味のあるだけ省作の離縁話はいたるところに盛んである。某々がたいへんよい所へ片づいて非常に仕合せがよいというような噂は長くは続かぬ。しかしそれが破縁して気の毒だという場合には、多くの人がさも心持ちよさそうに面白く興がって噂するのである。あんまり仕合せがよいというので、小面憎く思った輩はいかにも面白い話ができたように話している。村の酒屋へ瞽女を留めた夜の話だ。瞽女の唄が済んでからは省作の噂で持ち切った。

「省作がいったいよくない。一方の女を思い切らないで、人の婿になるちは大の不徳義だ、不都合きわまつた話だ。婿をとる側になつてみたまえ、こんなことされて堪るもんか」

こう言うのは深田鼯鼠の連中だ。

「そうでないさ、省作だつて婿になると決心した時には、おとよの事はあきらめていたにきまつてるさ。第一省作が婿になる時にや、おとよはまだ清六の所にいたじゃないか。深田も懇望してもらつた以上は、そんな過ぎ去つた噂なんぞに心動かさないで大事にしてやれば、省作は決して深田の家を去るのではない。だからありや深田の方が悪いのだ。何も省作に不徳義なこたない」

これは小手びいき鼻屑の言うところだ。

「えいも悪いもない、やつぱり縁のないのだよ。省作だって、身しんしょう上はよし、おつねさんは憎にくくなかつたのだから、いたくないこともなかつたろうし、向うでも懇望したくらいだからもとより置きたいにきまつてる、それが置けなくなりいられなくなったのだから、縁がないのさ」

こんなこというは婆と呼ばれる酒屋の内儀おかみだ。

「みんな省さんが悪いんさ、ほんとに省さんは憎いわ。省さんはあんなえい人だからおとよさんがどうしてもあきらめられない、おとよさんがあきらめねけりや、省さんは深田にいられやしない。深田のおツ母さんはたいへんおとよさんを恨んでるつさ。おつねさんもね、実は省さんを置きたかつたんだって、それだから、省さんが出たあとで三日寝ていたつち話だ。わたしやほんとにおつねさんがかわいそうだわ、省さんはほんとに憎いや」

これは女側から出た声だ。

「なんだいべらぼう、ほめるんやらくさすんやら、お気の毒さま、手がとどかないや。省さんほんとに憎いや、もねいもんだ」

「そんなに言うない。おはまさんなんかかわいそうな所があるんだアな、同病相あいあわれ憐む

…

「おとよさんほしいというか、嬢かかあにいいつけてやると、やあいやあい」

で話はおしまいになる。おはまが帰つて一々省作に話して聞かせる。そんな次第から省作は奥へ引つ込んで、夜でなけりや外へ出ない。隣の人たちにもどうも工合が悪い。

おはまばかり以前にも増して一生懸命に同情しているけれど、向うが身しんしょう上うへがえいというので、仕度にも婚礼にも少なからぬ費用を投じたにかかわらず、四月よつきといられないで出て来た。それも身から出た錆さびというような始末だから一層兄夫婦に対して肩身が狭い。自分ばかりでなく母までが肩身狭がつている。平生へいぜい生せいごく人のよい省作のことゆえ、兄夫婦もそれほどつらく当たるわけではないが、省作自ら氣が引けて小さくなっている。のっそり坊も、もうのっそりしていられない。省作もようやく人生の苦勞ということを知りそめた。

深田の方でも娘が意外の未練に引かされて、今一度親類の者を迎えにやろうかとの評議があつたけれど、女親なる人がとても駄目だめだからと言い切つて、話はいよいよ離別と決定してしまつた。

上総かずさは春が早い。人の見る所にも見ない所にも梅は盛りである。菜の花も咲きかけ、麦

の青みも繁^{しげ}りかけてきた、この頃の天気続き、毎日長閑^{のどか}な日和^{ひより}である。森をもつて分^{わか}つ村々、色をもつて分^{わか}つ田園、何もかもほんのり立ち渡る霞^{かすみ}につつまれて、ことごとく春という一つの感じに統一^{はる}されてる。

遥^{はる}かに聞ゆる九十九里^{くじゅうくり}の波の音、夜から昼から間断なく、どうどうどうと穏やかな響きを霞の底に伝えている。九十九里の波はいつでも鳴ってる、ただ春の響きが人を動かす。九十九里付近一帯の村落に生^おい立ったものは、この波の音を直^{ただ}ちに春の音と感じている。秋の声ということばがあるが、九十九里一帯の地には秋の声はなくてただ春の音がある。

人の心を穏やかに穏やかにと間断なく打ちなだめているかと思われるは、この九十九里の春の音である。幾千年の昔からこの春の音で打ちなだめられてきた上総^{かずさ}下総^{しもづさ}の人には、ほとんど沈痛な性質を欠いている。秋の声を知らない人に沈痛な趣味のありようがない。秋の声は知らないでただ春の音ばかり知ってる両総の人の粋は温良の二字によって説明される。

省作はその温良な青年である。どうしたって省作を憎むのは憎む方が悪いとしか思われぬ。省作は到底春の人である。慚愧^{ざんき}不安の境涯^{きょうがい}にあつてもなお悠々^{ゆうゆう}迫らぬ趣がある。

省作は泣いても春^{はる}雨^{さめ}の曇りであつて雪^{ゆき}氣^けの時^し雨^{ぐれ}ではない。

いやなことを言われて深田の家を出る時は、なんのという氣で大^{おお}手^てを振って帰ってきた省作も、家に来てみると、家の人たちからはお前がよくないとばかり言われ、世間では意外に自分を冷笑し、自分がよくないから深田を追ひ出されたように噂^{うわさ}をする。いつのまか自分でも妙に失態をやつたような氣になった。臆^{おく}病^{びょう}に慚^{ざん}愧^き心^{しん}が起こつて、世間へ出るのが厭^{いや}で堪^{たま}らぬ。省作の胸中は失意も憂愁もないのだけれど、周囲からやみ雲にそれがあるように取り扱われて、何となし世間と隔てられてしまった。それでわれ知らず日^ひ陰^{かげ}者^{もの}のように、七、八日奥座敷を出ずにいる。家の人たちも省作の心は判^は然^{つきり}とはわからないが、もう働いたらよかろうともえ言わないで好きにさしておく。

この間におはまは小さな胸に苦勞をしながら、おとよ方^{かた}に往復して二人の消息を取り次^{ふたり}いだ。省作は長い長い二回の手紙を読み、切実でそうして明快なおとよが心線に触れたのである。

萎^{しお}れた草花が水を吸い上げて生氣を得たごとく、省作は新たなる血潮が全身にみなぎるを覺えて、命が確實になつた心持ちがするのである。

「失態も糸瓜^{へちま}もない。世間の奴^{やつ}らが何と言つたつて……二人の幸福は二人で作る、二人の

幸福は二人で作る、他人の世話にはならない」

こう独言ひとりごとを言いつつ省作は感に堪たえなくなつて、起たつて座敷じゆうをうろうろ歩きをするのである。省作はもう腹の中の一切のどどこおりがとれてしまつて、胸はちやんと定きまつた。胸が定まれば元氣はおのずから動く。

翌朝省作は起こされずに早く起きた。

「おッ母さん仕事着は」

とどなる。

「ウム省作起きたか」

「あ、おッ母さん、もう働くよ」

「ウムどうぞま、そうしてくろや。お前に浮かぬ顔して引ッ込んでいられると、おらな寿命なが縮まるようだったわ」

中なかしきりの鏡戸かがみどに、ずんずん足音響かせてはや仕事着の兄がやってきた。

「ウン起きたか省作、えい加減にして土竜もぐらの芸当はやめろい。今日はな、種井たねいを浚さらうから手伝え。くよくよするな、男らしくもねい」

兄のことばの終わらぬうちに省作は素足で庭へ飛び降りた。

彼岸がくれば粃種もみだねを種井の池に浸す。種浸す前に必ず種井の水を汲くみほして掃除そうじをせねばならぬ。これはほとんどこの地の習慣で、一つの年中行事になってる。二月に入ればよい日を見て種井浚いをやる。その夜は茶飯ちやめしぐらいこしらえて酒の一升も買うときまってる。

今日は珍しくおはま満藏と兄と四人手揃てそろいで働いたから、家じゅう愉快に働いた。この晩兄はいつもより酒を過ごしてる。

「省作、今夜はお前も一杯やれい。おらこれでもお前に同情してると、ウム人間はな、どんな事があつても元氣をおとしちゃいけない、なんでも人間の事は元氣一つのもんだよ」

「兄にいさん、これでわたしだつて元氣があります」

「アハ、、、、、そうか、よし一杯つげ」

省作も今日は例の穏やかな顔に活氣がみちてるのだ。二つ三つ兄と杯を交換して、曇りのない笑いを湛たたえている。兄は省作の顔を見つめていたが、突然、

「省作、お前はな、おとさんと一緒になると決心してしまえ」

省作も兄の口からこの意外な言を聞いて、ちよつと返答に窮した。兄は語を進めて、

「こう言い出すからにやおれも骨を折るつもりだど、ウン世間がやかましい……そんな事

かまうもんか。おツ母さんもおきつも大反対だがな、隣の前が悪いとか、深田に対してはずかしいとかいうが、おれが思うにやそれは足もとの遠慮というものだ。な、お前がこれから深田よりさらに財産のある所へ養子にいったところで、それだけでお前の仕合せを保証することはできないだろう。よせよせ、婿にゆくなんどいうばかな考えはよせ。はま公、今一本持つてこ」

おはまは笑いながら、徳利を持って出た帰りしなに、そつと省作の肩をつねった。

「まあよく考えてみろ、おとよさんは少しぐらいの財産に替えられる女ではないぞ。そうだ、無論おとよさんの料簡りょうけんを聞いてみてからの事だ。今夜はこれで止めておく。とくと考えておけ」

兄は見かけによらず解わかつた人であつた。まだ若年な省作が、世間的に失敗した今の境遇を、兄は深く憐あわれんだのである。省作の精神を大抵推知しながら先を越して弟に元気をつけたのである。省作は腹の中で、しみじみ兄の好意を謝した。省作は今が今まで、これほど解つてゐる人で、きつぱりとした決断力のある人とは思わなかつた。省作はもう嬉うれしくて堪たまらない。だれが何と言つてもと心のうちで覚悟を定めていた所へ、兄からわが思いのとおりの事を言われたのだから嬉しいのがあたりまえだ。省作はあらん限りの力を出して平気

を装うていたけれど、それでもおはまには妙な笑いをくれられた。省作は昨日の手紙によつて今夜九時にはおとよの家の裏までゆく約束があるのである。

三

女の念力などいうこと、昔よりいつてる事であるが、そういうことも全くないものとはいわれんようである。

おとよは省作と自分と二人の境遇を、つくづくと考えた上に所詮余儀ないものと諦め、省作を手離して深田へ養子にやり、いよいよ別れという時には、省作の手に涙をふりそそいで、

「こうして諦めて別れた以上は、わたしのことは思い棄て、どうぞおつねさんと夫婦仲よく末長く添い遂げてください。わたしは清六の家を去ってから、どういう分別になるか、それはその時に申し上げましょう。ああそうでない、それを申し上げる必要はないでしょう、別れてしまった以上は」

ことばには立派に言つて別れたものの、それは神ならぬ人間の本音ではない。余儀ない

事情に迫られ、無理に言わせられた表面の口の端くちに過ぎないのだ。

おとよは独身ひとりみになって、省作は妻ができた。諦めるとことばには言うても、ことばのとおりには心はならない。ならないのがあたりまえである。浮気の恋ならば知らぬこと、真し底んそこから思いあつた間柄が理屈で諦められるはずがない。たやすく諦めるくらいならば恋ではない。

おとよは意志の強い人だ。強い意志でわが思いを抑おさえている。いくら抑えてもただ抑えているというだけで、決して思いは消えない。むしろ抑えているだけ思いはかえつて深くなる。一念深く省作を思うの情は増すことはあるとも減ることはない。話し合いで別れて、得心とくしんして妻を持たせながら、なおその男を思っているのは理屈に合わない。いくら理屈に合わなくとも、そういうかないのが人間のあたりまえである。おとよ自身も、もう思うまいもう思うまいと、心にもがいているのだけれど、いくらもがいてもだめなのである。

「わたしはまあ、しようがないなあ、どうしたらえんだろ、ほんとにしようがないな」

人さえいなければそういつて溜息ためいきをつくのは夜ごと日ごとのことである。さりとてよそ目に見たおとよは、元氣よく内外うちそとの人と世間話もする。人が笑えば共に笑いもする。胸に屈託のあるそぶりはほとんど見えない。近所隣へいった時、たまに省作の噂うわさなど出た

とおとよは色も動かしやしない。かえつておとよさんは薄情だねいなどかげごと蔭言を聞くくらいであった。それゆえおとよが家に帰つて二月たたないうちに、省作に対するおとよの噂はいつ消えるとなしに消えた。

胸にやるせなき思いを包みながら、それだけにたしなんだおとよは、えらいものであるが、見る人の目から見れば決して解わからぬのではない。

燃えるような紅顔であつたものが、ようやくあかみが薄らいでいる。白い部分は光沢を失つてやや青みを帯おんでいる。引き締まつた顔がいよいよ引き締まつて、眼めは何となし曇っている。これを心に悩みあるものと解らないようでは恋の話はできない。

それのみならず、おとよは愛想のよい人でだれと話してもよく笑う。よく笑うけれどそれは真からの笑いではない。ただおはまが来た時にばかり、真に嬉うれしそうな笑いを見せる。それはどういうわけかと聞かなくても解ろう。それでおはまが帰る時には、どうかすると涙を落すことがある。

それならばおはまを捕えて、省作の話ばかりするかと見るに決してそうでもない。省作の話はむしろあまりしたがらない。いつでも少し立ち入った話になると、もうおよしと言つてしまう。直接には決して自分の心持ちを言わない。また省作の心を聞こうともせぬ。

その癖、省作の事については僅かな事にまで想像以外に神経過敏である。深田の家は財産家であるとか、省作は深田の家の者に気に入られているとか、省作は元氣よく深田の家に働いているとか、省作はあまり自分の家へ帰つてこないとか、こんな噂を聞こうものなら、何べん同じ噂を聞いても、人の前にいらなくなつて、なんとか言つて寝てしまうのが常である。そりやおとよの事ゆえ、もちろん人の目に止まるようなことはせぬ。でそういう所に意志を労するだけおとよの苦痛は一層深いことも察せられる。もとより勝ち氣な女の持ち前として、おとよがかれこれ言うたから省作は深田にいないと世間から言われてはならぬと、極端に力を入れてそれを氣にしていた。それであるから、姉妹もただならぬほど睦まじいおはまがありながら、別後一度も、相思の意を交換した事はない。

表面すこぶる穏やかに見えるおとよも、その心中には一分間の間も、省作の事に苦勞の絶ゆることはない。これほどに底深く力強い思いの念力、それがどうして省作に伝わらずにしよう。

省作は何事も敏活にはやらぬ男だ。自分の意志を口に現わすにも行動に現わすにも手間のとれる男だ。思う事があつたつて、すぐにそれを人に言うような男ではない。それゆえおとよの事については随分考えておつても、それをおはまにすら話さなかった。ことに以

前の單純の時代と反對に、自分にはとにかく妻というものができ、一方には元の恋中の女が独身でいて、しかもどうやら自分の様子に注意しているらしく思われる境涯、年若な省作にはあまりに複雑すぎた位置である。感覺の働किが鈍つたわけではないけれど、感覺の働किがまごついてゐるような状態にある。省作はまるで自分の体が宙に釣られてる思いがしてゐる。こういう時には必ず他の強い勢力を感じやすい。おとよの念力が極々細微な径路を伝わつて省作を動かすに至つた事は理屈に合っている。

「おとよさんは、わたしがいくとそりや嬉しがるの、いくたびにそうなの、人がいないとわたしを抱いてしまうの、それでわたしが帰る時にはどうかすると涙をこぼすの」

おはまからこれだけの言を聞いたばかりで、省作はもう全身の神経に動揺を感じた。この時もはや省作は深田の婿でなくなつて、例の省作の事であるから、それを俄かに行為の上に現わしては来ないが、わが身の進轉を自ら抑える事のできない傾斜の滑道にはいつてしまった。

こんな事になるならば、おとよはより早く、省作と一緒にゐる目的をもつて清六の家を去ればよかつた。そうすれば省作も人の養子などにいく必要もなく、無垢な少女おつねを泣かせずにも済んだのだ。この解り切つた事を、そうさせないのが今の社会である。社会

というものは意^{おも}外^いばかなことをやっている。自分がその拘束に苦しみ切っていないながら、依然として他を拘束しつつある。

四

土屋の家では、省作に対するおとよの噂^{うわさ}も、いつのまにか消えたので大いに安心していったところ、今度省作が深田から離縁されて、それも元はおとよとの関係からであると評判され、二人の噂^{ふたり}は再び近村^{かい}界^{わい}限の話し草になったので、家じゆう顔合せて弱ってる。おとよの父は評判のむずかしい人であるから、この頃は朝から苦^{にが}虫^{がむし}を食いつぶしたような顔をしている。おとよの母に対しては、これからは、あのはまのあまなんぞ寄せつけてはならんぞとどなった。

おとよはそれらの事を見ぬふり聞かぬふりで平気を装うているけれど、内心の動揺は一通りでない。省作がいよいよ深田を出てしまったと、初めて聞いた夜はほとんど眠らなかつた。

思慮に富めるおとよは早くも分別してしまった。自分にはとても省^{あきこ}さんを諦められない。

諦められないことは知れていながら、余儀ないはめになって諦めようとしたものの駄目であつたのだから、もうどうしたつて諦められはしない。今が思案の定め時だ。ここで覺悟をきめてしまわねば、またどんな事になろうも知れない。省さんの心も大抵知れて、深田にいないところで省さんの心も大抵知れてる。おとよはひとりでにつこり笑つて、きつぱり自分だけの料簡を定めて省作に手紙を送つたのである。

省作はもとより異存のありようがない、返事は簡単であつた。

深田にいられないのもおとよさんゆえだ。家に歸つて活き返つたのもおとよさんゆえだ。もう毛のさきほども自分に迷いはない。命の総てをおとよさんに任せる。

こういう場合に意志の交換だけで、日を送つていられるくらいならば、交換したことばは偽りに相違ない。抑えられた火が再び燃えたつた時は、勢い前に倍するのが常だ。

そのきさらぎの望月の頃に死にたいとだれかの歌がある。これは十一日の晩の、しかも月の幽かな夜ふけである。おとよはわが家の裏庭の倉の底に洗濯をやっている。

こんな夜ふけになぜ洗濯をするかというに、風呂の流し水は何かのわけで、洗い物がよく落ちる、それに新たに湯を沸かす手数と、薪の儉約とができるので、田舎のたまかな家ではよくやる事だ。この夜おとよは下心あつて自分から風呂もたててしまいの湯の洗濯に

かこつけ、省作を待つのである。

おとよが家の大体をいうと、北を表に県道を前にした屋敷構えである。南の裏庭広く、物置きや板倉が縦に母屋に続いて、短冊形に長めな地なりだ。裏の行きとまりに低い珊瑚樹の生垣、中ほどに形ばかりの枝折戸、枝折戸の外は三尺ばかりの流れに一枚板の小橋を渡して広い田圃を見晴らすのである。左右の隣家は椎森の中に萱屋根が見える。九時過ぎにはもう起きてるものも少なく、まことに静かに穏やかな夜だ、月は隣家の低い森の上に傾いて、倉も物置も庇から上にばかり月の光がさしている。倉の軒に迫って繁れる梅の樹も、上半の梢にばかり月の光を受けている。

おとよは今その倉の庇、梅の根もとに洗濯をしている。うつすら明るい梅の下に真白い顔の女が二つの白い手を動かしつつ、ぽちやぽちや水の音をさせて洗い物をしているのである。盛りを過ぎた梅の花も、かおりは今は盛らしい。白い手の動くにつれて梅のかおりも漂いを打つかと思われる、よそ目に見るとも胸おどろしそうなこの風情を、わが恋人のそれと目に留った時、どんな思いするかは、他人の想像しうる限りでない。

おとよはもう待つ人のくる刻限と思うので、しばしば洗濯の手を止めては枝折戸の外へ気を配る。洗濯の音は必ず外まで聞えるはずであるから、省作がそこまでくれば躊躇躊躇

するわけではない。忍びよる人の足音をも聞かんと耳を澄ませば、夜はようやく更ふけていよいよ静かだ。

表通りで夜番よばんの拍子木ひょうしぎが聞える。隣となり村むららしい犬の遠とぼえも聞える。おとよはもはやほとんど洗濯の手を止め、一応母屋おもやの様子にも心を配った。母屋の方では家その物まで眠っているごとく全くの寝静まりとなつた。おとよはもう洗せんい物には手が着かない。起たつてうろうろする。月の様子を見て梅のかおりに気づいたか、

「おおえいかおり」

そつと一こと言つて、枝折戸しおりどの外を窺うかがう。外には草を踏む音もせぬ。おとよはわが胸の動悸どうきをまで聞きとめた。九十九里の波の遠音は、こういう静かな夜にも、どうーどうーど
うーどうーと多くの人の睡ねむりをゆすりつつ鳴るのである。さすがにおとよは落ちつきかね、
われ知らず溜息ためいきをつく。

「おとよさん」

一こえきわめて幽かすかなながら紛るべくもあらぬその人である。同時に枝折戸は押された。
省作は俄にわかに寒けだつてわなわなする。おとよも同じように身顫みふるいが出る。這般しゃはんの消息
は解し得る人の推諒すいりょうに任せる。

「寒いことねい」

「待ったでしょう」

おとよはそつと枝折戸に鍵^{かぎ}をさし、物の陰を縫うてその恋人を用意の位置に誘うた。

おとよは省作に別れてちやうど三月になる。三月の間は長いとも短いともいえる、悲しく苦しく不安の思いで過ぎさば、わずか百日に足らぬ月日も随分長かった思いがしよう。二人にとつてのこの三月は、変化多き世の中にもちよつと例の少ない並ならぬ三月であつた。

身も心も一つと思ひあつた二人が、全くの他人となり、しかも互いに諦^{あきら}められずにいながら、長く他人にならんと思いつつ暮した三月である。

わが命はわが心一つで殺そうと思へば、たしかに殺すことができる。わが恋はわが心一つで決して殺すことはできない。わが心で殺し得られない恋を強^しいて殺そうとかかつて遂^{つい}に殺し得られなかつた三月である。

しかしながら三月の間は長く感じたところで数は知れている。人の夫とわが夫との相違は数をもつていえない隔たりである。相思の恋人を余儀なく人の夫にして近くに見ておつたという悲惨な経過をとつた人が、ようやく春の恵みに逢^おうて、新しき生命を授けられ、

梅花月光の契りを再びする事になったのはおとよの今宵だ。感きわまって泣くくらいのことではない。

おとよはただもう泣くばかりである。恋人の膝にしがみついたまま泣いて泣いて泣くのである。おとよは省作の膝に、省作はおとよの肩に互いに頭をつけ合つて一時間のその余も泣き合つていた。

もとより灯のある場合ではない。頭はあげても顔見合すこともできず、ただ手を取り合っているばかりである。

「省さん、わたしは嬉しい」

ようよう一こと言つたが、おとよはまた泣き伏すのである。

「省さん、あとから手紙で申し上げますから、今夜は思うさま泣かしてください」

しどろもどろにおとよは声を呑むのである。省作はどうとう一語も言い得ない。

悲しくつらく玉の緒も断えんばかりに危かりし悲惨を免れて僅かに安全の地に、なつかしい人に出逢うた心持ちであろう。限りなき嬉しさの胸に溢れと等しく、過去の悲惨と烈しき対照を起こし、悲喜の感情相混交して激越をきわむれば、だれでも泣くよりほかならう。

相思の情を遂げたとか恋の満足を得たとかいう意味の恋はそもそも恋の浅薄なるものである。恋の悲しみを知らぬ人には恋の味は話せない。

泣いて泣いて泣きつくして別れた二人には、またとても言い表すことのできない嬉しさを分ち得たのである。

五

翌晩省作からおとよの許に手紙がとどいた。

「前略お互いに知れきった思いを今さら話し合う必要もないはずですが、何だかわたしはただおとよさんの手紙を早く見たくてならない、わたしの方からも一刻も早く申し上げたいと存じて筆を持っても、何から書いてよいか順序が立たないのです。

昨夜は実に意外でした、どうせしみじみと話のできる場合ではないですけれど、少しは話もしたかったし、それにわたしはおとよさんを悦よろこばせる話も持っていたのです、溜たまりに溜った思いが一時に溢れたゆえか、ただおどおどして咽むせて胸のうちはむちやくちやになつて、何の話もできなく、せつかくおとよさんを悦ばせようと思つてた話さえ、思いださ

ずになりましたは、自分ながら実に意外でした、しかしながら胸いっぱいにつかえて苦しめて堪^{たま}らなかつた思いを、二人で泣いて一度に泣き流したのですからあとの愉快さは筆にはつくせません、これはおとよさんも同じことでしょう。昨夜おとよさんに別れて帰るさの愉快は、まるで体が宙を舞って流れるような思いでした。今でもまだ体がふわふわ浮いてるような思いであります。わたしののような仕合せなものはないと思うと嬉しくて嬉しくて堪りません。

これから先どういうふうにして二人が一緒になるかの相談はいずれまた逢^あつての上にしましよう。あなたを悦^{よろこ}ばせようと申した事は、母や姉は随分不承知なようですが、肝心な兄は、「お前はおとよさんと一緒になると決心しろ」と言うてくれたのです。兄は元からおとよさんがたいへん気に入りののです。もう私の体はたいした故障もなくおとよさんのものです。ですから私の方は、今あせて心配しなくともよいです。それに二人について今世間が少しやかましいようですから、ここしばらく落ちついて時を待ちましょう。それにしてもおとよさんにはまたおとよさんの考えがありましよう。おうちの都合はどんなふうですかそれも聞きたいし、わたしはおとよさんの手紙を早く見たい」

省作の手紙はどこまでも省作らしく暢^{のんき}気なところがある。そのまた翌日おとよから省作

に手紙をだした。

「わたしから先にと思いましたに、まずあなた様よりのお手紙で、わたしは酔わされてしまいました。出しては読み出しては読み、差し上げる手紙を書く料簡りょうけんもなく、昨夜一ばん埒うちもなく過ごしました。先夜はほんとに失礼いたしました。ただ悲しくて泣いた事を夢のように覚えてるばかり、ほかの事は何も覚えていません。あとであんまり失礼であつたと思いました。それもこれも悲しさ嬉しうれさ一度に胸にこみ合い止め度なくなつたゆえとおゆるし下されたく、省さま、わたしはこの頃無むしようとなつて気が弱くなりました。あなたさまの事を思えばすぐ涙が出ますの。それにつけてもありがたいお兄様のおことば、あなたさまの方はそれで安心ができます。

わたしの考えには深田の手前秋葉（清六の家）の手前あなたのお家にしてもわたしの家にしても、私ども二人が見すばらしい暮しを近所にしておつたでは、何分世間が悪いでしょう、して見れば二人はどうしても故郷を出退でくほかないと思います。精くわしくはお目にかかつての事ですが、東京へ出るがよいかと思ひます。

それにつけてもわたしの家ですが、御承知のとおり親父おやじはまことに片意地の人ですから、とてもわたしの言うことなどは聞いてくれそうありません。それに昨今どうやらわたし

の縁談ばなしがある様子に見えます。また間違いの起こらぬうちに早くというような事をちらと聞きました、なんという情けない事でしよう。省さんが一人の時分にはわたしに相手があり、わたしが一人になれば省さんに相手がある、今度ようやく二人がこうと思えば、すぐにわたしの縁談、わたしは身も世もあらぬ思い、生きた心はありません。

けれども省様、この上どのような事であろうとわたしの覚悟は動きませぬ。体はよし手と足と一つ一つにちぎりとりるるともわたしの心はあなたを離れませぬ。

こうは覚悟していますものの、いよいよ二人一緒になるまでには、どんな艱難かんなんを見ることが判りわかませぬ。何とぞわたしの胸の中を察してくださいませ。常にも似ず愚痴ばかり申し上げ失礼いたし候そうろう。こんな事申し上ぐるにも心は慰み申し候。それでも省さまという人のあるわたし、決して不仕合せとは思ひませぬ」

種まきの仕度で世間は忙しい。枝垂柳しだれやなぎもほんのり青みが見えるようになった。彼岸ひがんだ桜くらの咲くとか咲かぬという事が話の問題になる頃は、都でも田舎いなかでも、人の心の最も浮き立つ季節である。

某なにがしの家では親が婿を追い出したら、娘は婿について家を出てしまった、人が仲裁して親

はかえすというに今度は婿の方で帰らぬというとか、某の娘は他国から稼かせぎに来てる男と馴なれ合つて逃げ出す所を村界むらさかいで兄に抑おさえられたとか、小さな村に話の種が二つもできたので、もとより浮気ならぬ省作おとよの恋話も、新しい話に入りかわってしまった。

六

珊瑚樹垣さんごじゆがきの根には路ふきの臺とうが無邪氣に伸びて花を咲きかけている。外の小川にはところどころ隈取りくまどを作つて芹生せりふが水の流れを狭せめている。燕つばめの夫婦が一つがい何か頻しきりと語らいつつ苗代なわしろの上を飛び廻まわつている。かぎろいの春の光、見るから暖かき田圃たんぼのおちこち、二人三人組をなして耕すもの幾組、麦むぎ冊さくをきるもの菜種こえに肥を注ぐもの、田園ようやく多事の時である。近き畑の桃の花、垣根の端はしの梨なしの花、昨夜の風に散つたものか、苗代の隅まわりには花びらの小紋が浮いている。行儀よく作られた苗坪ははや一寸ばかりの厚みに緑を盛り上げている。燕の夫婦はいつしか二つがいになった、時々緑の短冊に腹すを擦すつて飛ぶは何のためか。心長閑のしとかにこの春光に向かわば、詩人ならざるもしばらく世俗の紛ふん紜うんを忘れうべきを、春愁堪え難き身のおとよは、とても春光を楽しむの人ではない。

男子家にあるもの少なく、婦女は養蚕の用意に忙しい。おとよは今日の長閑さに蚕籠を洗うべく、かつて省作を迎えた枝折戸の外に出ているのである。抑え難き憂愁を包む身の、洗う蚕籠には念も入らず、幾度も立つては田圃の遠くを眺めるのである。ここから南の方へ十町ばかり、広い田圃の中に小島のような森がある、そこが省作の村である。木立の間から倉の白壁がちらちら見える、それが省作の家である。

おとよは今さらのごとく省作が恋しく、紅涙頬に伝わるのを覚えない。

「省さんはどうしているかしら、手紙のやりとりばかりで心細くてしょうがない。こうしてお家も見えているのに、兄さんは、二人一緒になると決心しろって、今でもそう思っていて下さるのかしら」

おとよは口の底でこういつて省作の家を見てるのである。縁談の事もいよいよ事実になって来たらしいので、おとよは俄かに省作に逢いたくなった。逢って今さら相談する必要はないけれど、苦しい胸を話したいのだ。十時も過ぎたと思うに蚕籠はまだいくつも洗わない。おとよは思い出したように洗い始める。格好のよい肩に何かしらぬ海老色の襷をかけ、白地の手拭を日よけにかぶった、顎のあたりの美しさ。美しい人の憂えてる顔はかわいそうでたまらないものである。

「おとよさんおとよさん」

呼ぶのは嫂^{あによめ}お千代だ。おとよは返辞をしない。しないのではない、できないのだ。何の用で呼ぶかという事は解^{わか}つてゐるからである。

「おとよさん、おとツつさんが呼んでいますよ」

枝折戸^{しおりど}の近くまで来てお千代は呼ぶ。

「ハイ」

おとよは押し出したような声でようやくのこと返辞をした。十日ばかり以前から今日あることは判^{わか}つてゐるから充分の覚悟はしているものの、今さらに腹の煮え切る思いがする。

「さあおとよさん、一緒にゆきましょう」

お千代は枝折戸の外まできて、

「まあえい天気なこと」

お千代は気楽に田圃^{たんぼ}を眺めて、ただならぬおとよの顔には気がつかない。おとよは余儀なく襷^とをはずし手拭を採^とつて二人一緒に座敷へ上がる。待ちかねていた父は、ひとりで元氣よくにこにこしながら、

「おとよここへきてくれ、おとよ」

「ハア」

おとよは平生へいぜいでも両親ていねいに叮嚀ていねいな人だ、ことに今日は話が話と思うものから一層改まつて、畳二畳半ばかり隔てて父の前に座した。紫檀したんの盆くたにに九谷の茶器根来ねろうの菓子器、念入りの客なことは聞かなくとも解る。母も座におつて茶を入れ直している。おとよは少し俯うつむ向きになつて膝ひざの上の手を見詰めている。平生顔の色など変える人ではないけれど、今日はさすがに包みかねて、顔に血の氣けが失せほとんど白蠟はくろうのごとき色になつた。

自分ひとりで勝手な考えばかりしてる父はおとよの顔色などに氣はつかぬ、さすがに母みとがは見咎めた。

「おとよ、お前どうかしたのかい、たいへん顔色が悪い」

「ええどうもしやしません」

「そうかい、そんならいいけど」

母は入れた茶を夫のと娘のと自分のと三つの茶碗ちやわんについて配り、座についてその話を聞こうとしている。

「おとよ、ほかの事ではないがの、お前の縁談の事についてはずれの旦那だんなが来てくれて今歸られたところだ。お前も知つてゐるだろう、早船の斎藤さいとうよ、あの人にはお前も一度ぐら

い逢った事があるう、お互いに何もかも知れきつてゐる間だから、誠に苦まことなしだ。この月初めから話があつての、向うで言うにやの、おとよさんの事はよく知つてゐる、ただおとよさんが得心とくしんして来てくれさえすれば、来た日からでも身しんしょう上まかなの賄いもしてもらいたい。つての、それは執心な懇望よ、向うは三度目だけれどお前も二度目だからそりや仕方がない。三度目でも子供がないから初縁も同じだ。一度あんな所へやってお前にも氣の毒であつたから、今度は判わかつてゐるが念のために一応調べた。負債などは少しもない、地所はうちの倍ある。一度は村長までした人だし、まあお前の婿にして申し分のないつもりじゃ。お前はあそこへゆけばこの上ない仕合せとおれは思うのだ。それでもう家じゆう異存はなし、今はお前の挨拶あいさつ一つできまるのだ。はずれの旦那はもうちゃんときまつたようなつもりで歸られた。おとよ、よもやお前に異存はあるまいの」

おとよは人形のようになつてだまつてゐる。

「おとよ、異存はねいだの。なに結構けつこう至極な所だからきめてしまつてもよいと思つたけれど、お前はむずかしやだからな、こうして念を押すのだ。異存はないだろう」

まだおとよは黙つてゐる。父もようやく娘の顔色に氣づいて、むつとした調子に声を強め、「異存がなければきめてしまふぞ。今日じゆうに挨拶あいさつと思うたが、それも何かと思つて明日あす

じゆうに返辞をするはずにした。お前も異存のあるはずがないじゃねいか、向うは判りきつてゐる人だもの」

おとよはようやく体を動かした。ふるえる両手を膝ひざの前に突いて、

「おとツつさん、わたしの身の一大事の事ですから、どうぞ挨拶を三日間待つてください……」

おとよはややふるえ声でこう答えた。さすがに初めからきつぱりとは言いかねたのである。おとよの父は若い時から一いつく酷こくもので、自分が言いだしたらあとへは引かぬということを自慢にしてきた人だ。年をとつてもなかなかその性しょうはやまない。おれは言いだしたら引くのはいやだから、なるべく人の事に口出しせまいと思つてると言いつつ、あまり世間へ顔出しもせず、家の事でも、そういうつもりか若夫婦のやる事に容易に口出しもせぬ。そういう人であるから、自分の言つたことが、聞かれないと執念深く立腹する。今おとよの挨拶あいさつぶりが、不承知らしいので内心もう非常に激昂げつこうした。ことに省作の事があるから一層怒おこつたらしく顔色を変えて、おとよをねめつけていたが、しばらくしてから、

「ウム、それではきさま三日たてば承知するのか」
おとよは黙っている。

「とよ黙つてはわかんね。三日たてば承知するかと言うんだ。なアおとよ、わが娘がらお前はよく物の解^{わか}る女だ。こうして、おれたちが心配するのも、皆お前のためを思うての事だど」

「おとつさんの思^{おも}ひ召しはありますが、一度わたしは懲りていますから、今度こそわが身の一大事と思います。どうぞ三日の間考えさしてください。承知するともしないともこの三日の間にわたしの料^{りようけん}簡^{かん}を定^きめますから」

父は今にも怒号せんばかりの顔色であるけれど、問題が問題だけにさすがに怒りを忍んでいる。

「こちらから明日じゆうに確答すると言つた口上に対しまして二日間挨拶を待つてくれということが言えるか。明日じゆうに判^{わか}らぬことが、二日延べたとて判る道理があんめい。そんな人をばかにしたような言^{こと}を人様にいえるか、いやとも応とも明日じゆうには確答してしまわねばならん。

おとよ、なんとかもう少し考えようはないか。両親兄弟が同意でなんでお前に不^ふ為^{ため}を勧めるか。先度は親の不注意もあつたと思えばこそ、ぜひ斎藤へはやりたいのだ。どこから見たつて不足を言う点がないではないか、生^{なまわか}若^{わか}いものであると料簡^{りょうかん}の見留^{みと}めもつきにく

いが斎藤ならばもう安心なものだ。どうしても承知ができないか」

父は沸^にえる腹をこらえ手を握^さつて諭^{さと}すのである。おとよは瞬^{まばた}きもせず膝^{ひざ}の手を見つめたまま黙^たっている。父はもう堪^{たま}りかねた。

「いよいよ不承知なのだ。きさまの料簡は知れてるわ、すぐにきつぱりと言えないから、三日の間などとぬかすんだ。目の前で両親をたばかってやがる。それでなんだな、きさまは今でもあの省作の野郎と関係していやがるんだな。ウヌ生^{いけ}ふざけて……親不孝ものめが、この上にも親の面に泥を塗るつもりか、ウヌよくも……」

おとよは泣き伏す。父はこらえかねた憤怒の眼を光らしいきなり立ち上がった。母もあわてて立ってそれにすがりつく。

「お千代やお千代や……早くきてくれ」

お千代も次の間から飛んできて父を抑^{おさ}える。お千代はようやく父をなだめ、母はおとよを引き立てて別間へ連れこむ。この場の騒ぎはひとまず済んだが、話はそのまま済むべきではない。

おとよの父は平生^{へいぜい}ことにおとよを愛し、おとよが一番よく自分の性質を受け継いだ子で、女ながら自分の話相手になるものはおとよのほかにはないと信じ、兄の佐介^{さすけ}よりはかえっておとよを頼もしく思っていたのである。おとよも父とはよく話が合い、これまでほとんど父の意に逆らった事はなかった。おとよに省作との噂^{うわさ}が立った時など母は大いに心配したに係らず、父はおとよを信じ、とよに限って決して親に心配を掛けるような事はないと、人の噂にも頓^{とん}着^{じやく}しなかった。はたして省作は深田の養子になり、おとよも何の事なく帰ってきたから、やっぱり人の悪口が多いのだと思うていたところ、この上もない良縁と思う今度の縁談につき、意外にもおとよが強固に剛情な態度を示し、それも省作との関係によると見てとつた父は、自分の希望と自分の仕合せとが、根柢^{こんてい}より破壊せられたごとく、落胆と憤懣^{ふんまん}と慚愧^{ざんき}と一時に胸に湧^わき返った。

さりとて怒ってばかりもおられず、憎んでばかりもおられず、いまいまして片意地に瘡^か張^{んば}つた中にも娘を愛する念も交^{まじ}つて、賢いようでも年が若いから一筋に思いこんで迷つてるものと思えば不慙^{ふびん}でもあるから、それを思い返させるのが親の役目との考えもないではない。

夕飯過ぎた奥座敷には、両親と佐介と三人火鉢ひばちを擁していても話にはずみがない。

「困ったあまつ子ができてしまった」

天井を見て嘆息するのは父だ。

「おとよはおとツつさんの氣に入りつ子だから、おとツつさんの言うことなら聞きそうなものだがな」

「お前こんな話の中でそんなこと言うもんじゃねいよ」

「とよは一体おれの言うことに逆らったことはないのに、それにこの上ないえい嫁の口だと思ふのに、あんなふうだから、そりや省作の關係からきてるに違いない。お前女親でいながら、少しも氣がつかんということがあるもんか」

「だってお前さん、省作が深田を出たといつてからまだ一月ぐらいにしかならないでしょう。それですからまさかその間にそんな事があるとは思いませんから」

「おツ母かさん、人の噂うわさでは省作が深田を出たのはおとよのためだと言いますよ」

「ほんとにそうかしら」

「実にいまいましいやつだ。婿にももらえず嫁にもやれずという男なんどに情を立ててどうするつもりでいやがるんだろ、そんなばかではなかったに。惜しい縁談だがな、断わっ

ちまう、明日早速^{さつそく}断わる。それにしてもあんなやつ、外聞悪くて家にや置けない、早速どつかへやつちまえ、いまましい」

「だつてお前さん、まだはつきりいやだと言つたんじゃなし、明日じゆうに挨拶^{あいさつ}すればいいですから、なおよくあれが胸も聞いてみましょう。それに省作との関係もです、嫁にやるやらぬは別としても糺^{ただ}さずにおかれません」

「なあにだめだだめだ、あの様子では……人間もばかになればなるものだ、つくづく呆れ^{あき}つちまつた。どういうもんかな、世間の手前もよし、あれの仕合せにもなるし、向うでは懇望^{こんぼう}なのだから、残念だなあ」

父はよくよく嘆息する。

「だから今一応も二応も言い聞かせてみてくださいな」

「おとよの仕合せだと言っても、おとよがそれを仕合せだと思わないで、たつて厭^{いや}だと言うなら、そりやしようがないでしょう」

「だれの目にも仕合せだと思うに、それをいわれもなく、両親の意に背くような、そんな我^{わがまま}儘はさせられないよ」

「させられないたって、おッ母さんしようがないよ」

「佐介、ばかいいをするな、おまえなどまでもそんな事いうようだから、こんな事にもなるのだ」

「わが身の一大事だから少し考えさせてくださいと言うのを、なんでもかでもすぐ承知しろと言うのはちつとひどいでしよう」

「それでは佐介、きさまもとよを斎藤へやるのは不同意か」

「不同意ではありませんけれど、そんなに厭だと言うならと思うんです。おとよの肩を持つて言うんじやありません。おとつさんのは言い出すとすぐ片意地になるから困る」

「なに……なにが片意地なもんか。とよのやつの厭だと言うにやいわくがあるからだ、厭だとは言わせられないんだ」

「佐介、もうおよしよ、これでは相談にはなりやしない。ねいおまえさん、お千代がよくあれの胸を聞くはずですから、この話は明日にしてください。湯がさめてしまった、佐介、茶にしろよ」

父はますますむずかしい顔をしている。なるほど平生へいぜいおれに片意地なところはあ、あるけれども今度の事は自分に無理はない、されば家じゅう悦よろこんで、滞りなく纏まとまる事と思いのほか、本人の不承知、佐介も乗り気にならぬという次第で父は劫げうが煮えて仕方がな

い、知らず知らず片意地になりかけている。呆れつちまった、どうしてあんなにばかになったか、もう駄目だ、断わってしまう、こう口には言っても、自分の思い立った事を、どんな場合にもすぐ諦めてよすような人ではない。いろいろ理屈をひねくって根気よく初志を捨てないのがこの人の癖である、おとよはこれからつらくなる。

お千代はそれほど力になる話相手ではないが悪気のない親切な女であるから、嫁小姑の仲でも二人は仲よくしている。それでお千代は親切に真におとよに同情して、こうなつて隠したではよくないから、包まず胸を明かせとおとよに言う。おとよもそうは思つていたのであるから、省作との関係も一切明かしたうえ、

「わたしは不仕合せに心に染まない夫を持つて、言うに言われないよくよく厭な思いをしましたもの、懲りたのなんのつて言うも愚かなことで……なんのために夫を持ちます、わたしは省作という人がないにしても、心の判らない人などの所へ二度とゆく気はありません。この上わたしが料簡を換えて外へ縁づくなら、わたしのした事はみんな淫奔になります。わたしのためわたしのためと心配してくださる両親の意に背いては、誠に済まない事と思いますけれど、こればかりは神様の計らいに任せて戴きたい、姉さんどうぞ堪忍してください、わたしの我儘には相違ないでしょうが、わたしはどうから覚悟をき

めています。今さらどのような事があるかと脇目^{わきめ}を振る気はないんですから」

お千代はわけもなくおとよのために泣いて、真からおとよに同情してしまった。その夜のうちにお千代は母に話し母は夫に話す。燃えるようなおとよのことばも、お千代の口から母に話す時は、大半熱はさめてる、さらに母の口から父に話す時は、全く冷静な説明になつてゐる。

「なんだつて……ここで嫁に出れば淫奔^{いたずら}になるつて……。ばかばかしい、てめいのしてゐる事が大の淫奔^{いたずら}じゃないか、親不孝者めが、そのままにしちやおけねい」

とにかく明日の事という事でこの夜はおしまいになった。

八

朝飯になるというにおとよはまだ部屋^{へや}を出ない。お千代が一人で働いて、家じゆうに御ぜんとたべさせた。学校へゆく二人^{ふたり}の兄^{きょうだい}妹^いに着物を着せる、座敷を一通り掃除^{そうじ}する、そのうちに佐介は鋏^{くわ}を肩にして田へ出てしまう。お千代はそつとおとよの部屋へはいって、「おとよさん今日はゆつくり休んでおいでなさい、蚕籠^{こかご}は私がこれから洗いますから」

そういわれても、おとよはさすがに寝てもいられず部屋を出た。一晚のうちにも痩せが目につくようである。父は奥座敷でぼんぼん煙草たばこを吸って母と話をしている。おとよは気が引けるわけもないけれども、今日はまた何といわれるのかと思うと胸がどきまぎして朝飯につく気にもならない、手水ちようずをつかい着物を着替えて、そのままお千代が蚕籠を洗つてゐる所へ行こうとすると、

「おとよ」

と呼ぶのは母であつた。おとよは昨日とやや同じ位置に座につく。

「おはようございます」

とかすかに言つて、両親のことばをまつ。わが親ながら顔見るのも怖ろしく、俯向うつむいてゐるのである。罪人が取り調べを受ける時でも、これだけの苦痛はなからうと思われる。おとよは胸で呼吸いきをしている。

「おとよ……お前の胸はお千代から聞いて、すっかり解わかつた。親の許さぬ男と固い約束のあることも判わかつた。お前の料簡りようけんは充分に判つたけれど、よく聞けおとよ……ここにこうして並んでゐる二人ふたりは、お前を産んでお前を今日まで育てた親だぞ。お前の料簡りようけんにすると両親は子を育ててもその子の夫つま定めには口出しができないと言うことになるが、そんな

事は西洋にも天竺てんじくにもあんめい。そりや親だもの、かわい子の望みとあればできることなら望みを遂げさしてやりたい。こうしてお前を泣かせるのも決して親自身のためでなくみんなお前の行く末思うての事だ。えいか、親の考えだから必ずえいとは限らんが、親は年をとつていろいろ経験がある、お前は賢くても若い。それでわが子の思うようにばかりさせないのは、これも親として一つの義務だ。省作だつて悪い男ではあんめい、悪い男ではあんめいけど、向うも出る人おまえも出る人、事が始めから無理だ。許すに許されない二人のないう事だ。いわば親の許さぬ淫奔いたずらというものでないか、えいか」

おとよはこの時はらはらと涙を膝ひざの上に落とした。涙の顔を拭ぬぐおうともせず、唇くちびるを固く結んで頭を下いへげている。母もかわいそうになつて眼めは潤うるんでいる。

「省作の家いえにしろ家うちにしろ、深田への手前秋葉への手前、お前たちの淫奔いたずらを許しては第一家の面目めんぼくが立たない。今度の斎藤に対しても実に面目もない事でないか。お前たち二人は好いた同士でそれでえいにしても、親兄弟の迷惑をどうする気か、おとよ、お前は二人さえよければ親兄弟などはどうでもえいと思うのか。できた事は仕方ないとしても、どうしてそれが改めてくれられない。省作への義理があろうけれど、それは人をもつて話のしようはいくらかもある。これまでは親兄弟に対してよく筋道の立つてたお前、このくらい

の道理の聞き判^{わか}らないお前ではなかったに、どうもおれには不思議でなんねい。おれはよんべちつとも寝なかつた」

こう言つて父も思い迫つたごとく眼に涙を浮かべた。母はどうから涙を拭^{ぬぐ}うている。おとよはもとより苦痛に身をささえかねている。

「それもこれもお前が心一つを取り直しさえすれば、おまえの運はもちろん、家の面目も潰^{つぶ}さずに済むというものだ。省作とてお前がなければまたえい所へも養子に行けよう。万^{ばん}方都合よくなるではないか。ここをな、おとよとくと聞き別けてくれ、理の解^{わか}らぬお前でないのだから」

父のことばがやさしくなつて、おとよのつらさはいよいよせまる。おとよも言いたいことが胸先につかえている。自分と省作との關係を一口に淫^{いたずら}奔^はといわれるは実に口惜^{くや}しい。さりとして両親の前に恋を語るような蓮葉^{はすつば}はおとよには死ぬともできない。

「おとつさんのおつしやるのは一々ごもつともで、重々わたしが悪うございますが、おとつさんどうぞお情けに親不孝な子を一人捨^{ひとり}ててください」

おとよはもう意地も我慢^{がまん}も尽きてしまい、声を立てて泣き倒れた。気の弱い母は、「そんならお前のすきにするがえいや」

「ウム立派に剛情を張りとおせ。そりやつらいところもあるう、けれども両親が理を分けての親切、少しは考えようもありそうなもんだ、理も非もなくどこまでも、我儘わがままをとおそうという料簡りようけんか、よしそんなら親の方にもまた料簡がある」

こういう放つて父は足音荒く起たつて出てしまう。無論縁談は止めになった。

省作というものがなくて、おとよがただ斎藤の縁談を避けたのみならば、片意地な父もそうまで片意地を言うまいが、人の目から見れば、どうしてもおとよが、好きな我儘をとおした事になるから、後の治まりがむずかしい。父はその後も幾度か義理づめ理屈づめでおとよを泣かせる。殺してしまうと騒いだのも一度や二度でなかった。たださえ剛情に片意地な人であるに、この事ばかりは自分の言う所が理義明白いささかも無理がないと思うのに、これが少しも通らぬのだから、一筋に無念でならぬのだ。これほど明白に判り切つた事をおとよが勝手我儘かつてわがままな私心わたくしごころ一つで飽くまでも親の意に逆らうと思いつめてるからどうしても勘弁ができない。ただ何といつてもわが子であるから仕方がなく結末がつかないばかりである。

おとよは心はどこまでも強固であれど、父に対する態度はまたどこまでも柔和にやうわだ。ただ、

「わたしが悪いのですからどうぞ見捨てて……」

とばかり言ってる。悪いと知ったら、なぜ親のことばを用いぬといえは泣き伏してしまう。
「斎藤の縁談を断わったのはお前の意を通したのだから、今度は相当の縁があつたら父の意に従えと言うのだ」

それをおとよはどうしても、ようございますといわないから、父の言い状が少しも立たない。それが無念で堪らぬのだ。片意地ではない、家のためだとはいうけれど、疳がつつつてきては何もかもない、我意を通したい一路に落ちてしまう。怒って呆れて諦めてしまえばよいが、片意地な人はいくら怒つても諦めて初志を捨てない。元来父はおとよを愛していたのだから、今でもおとよをかわいそうと思わないことはないけれど、ちよつと片意地に陥るとわが子も何もなくなる、それで通常は決して無情酷薄な父ではないのである。

おとよはだれの目にも判るほどやつれて、この幾日というもの、晴れ晴れした声も花やかな笑いもほとんどおとよに見られなくなつた。兄夫婦も母も見ていられなくなつた。兄は大抵の事は気にせぬ男だけれどそれでもある時、

「おとつさんのように、そう執念深くおとよを憎むのは一体解らない。死んでもえいと思ふくらいなら、おとよの料簡に任してもえいでしよう」

こういうと父は、

「うむ、そんな事いつてさんざん淫^{いたずら}奔^はをさせろ」

すぐそういうのだからどうしようもない。ことにお千代は極端に同情し母にも口説^{くど}き自分の夫にも口説^{くど}きしてひそかに慰藉^{いしや}の法を講じた。自ら進んで省作との間に文通も取り次ぎ、時には二人を逢^あわせる工夫もしてやった。

おとよはどんな悲しい事があつても、つらい事があつても、省作の便^{たよ}りを見、まれにも省作に逢うこともあれば、悲しいもつらいも、心の底から消え去るのだから、よそ目に見るほど泣いてばかりはいない。例の仕事上^{じょうず}手で何をしても人の二人前働いている。

父は依然として朝飯夕飯のたびに、あんなやつを家へ置いては、世間へ外聞が悪い、早くどこかへ奉公にでもやってしまえという。母は気の弱い人だから、心におとよをかわいそうと思ひながら、夫のいうことばに表立つて逆らうことはできない。

「おとよを奉公にやれといったって、おとよの替わりなら並みの女二人頼まねじゃ間に合^あわない」

いさくさなしの兄はただそういつたなり、そりやいけないとも、そうしようともいわない。飯が済めばさつさと田圃^{たんぼ}へ出てしまう。

九

世は青葉になつた。豌豆えんどうも蚕豆そらまめも元なりは莢さやがふとりつつ花が高くなつた。麦畑は
ようやく黄ばみかけてきた。鱒とじょうとりのかんてらが、裏の田圃に毎夜八つ九つ出歩くこの頃、
蚕は二眠が起きる、農事は日を追うて忙しくなる。

お千代が心ある計らいによつて、おとよは一日つぶさに省作に逢あうて、将来の方向につ
き相談を遂とぐる事になつた。それはもちろんお千代の夫も承知の上の事である。

爾来じらいことにおとよに同情を寄せたお千代は、実は相談などいうことは第二で、あまり農
事の忙しくならないうちに、玉の緒かけての恋中こいなかに、長閑のどかな一夜の睦言むつごとを遂げさせた
い親切にほかならぬ。

お千代が一緒というので無造作に両親の許しが出る。

かねて信心しんじんする養安寺村の蛇王権現だおうこんげんにお詣りまいをして、帰りに北の幸谷こうやなるお千代の
里まわへ廻り、晩おそくなれば里に一宿いっしゆくしてくるというに、お千代の計らいがあるのである。

その日は朝も早めに起き、二人して朝の事一通りを片づけ、互いに髪を結い合う。おと

よといつしよというのでお千代も娘作りになる。同じ銀杏いちようがえ返し同じ衾あわせそで小袖に帯もやや似寄った友禪縮緬ちりめん、黒の絹張りの傘かさもそろいの色であつた。緋ひの蹴出しけだしに裾端折すそはしおつて二人が庭に降りた時には、きらつく天氣に映つて俄にわかにそこら明るくなつた。

久しぶりでおとよも曇りのない笑いを見せながら、なお何となし控え目に内輪なるは、いささか氣きがが咎とがむるゆえであらう。

籠かごを出た鳥の二人は道々何を見ても面白そうだ。道ばたの家に天竺牡丹てんじくぼたんがある、立ち留つて見る。霧島が咲いてる、立ち留つて見る。西洋草花がある、また立ち留つて見る。お千代は苦も荷もなく暢氣のんきだ。

「おとよさん、これ見たえま、おとよさんてば、このきれいな花見たえま」

お千代は花さえ見れば、そこに立ち留つて面白がる。そうしてはおとよさん見たえまを繰り返す。元が暢氣のんきな生れで、まだ苦勞ということを味わわないお千代は、おとよをせつかくここまで連れて来ながら、おとよの胸の中は、なかなか道ばたの花などを立ち留つて見てるような暢氣でないことまでは思おもい遣やれない。お千代は年は一つ上だけれど、恋を語るにはまだまだ子供だ。

おとよはしよことなしにお千代のあとについて無意識に、まあ綺麗きれいなことまあ綺麗な

ことといいつつ、撥ぼつを合せている。蝙蝠傘こうもりがさを斜はすに肩にして二人は遊んでるのか歩わかいてるのか判らぬように歩いてる。おとよはもうもどかしくてならないのだ。

おとよは家を出るまでは出るのが嬉うれしく、家を出てしばらくは出たのが嬉しかったが、今は省作を思うよりほかに何のことも頭にない。お千代の暢気につれて、心にもない事がいい、面白く感ぜぬ事にも作り笑わらいして、うわの空に歩いている。おとよの心にはただ省作が見えるばかりだ、天竺牡丹てんじくぼたんも霧島も西洋草花も何もかもありやしない。

「省さんは先へいったのかしら、それともまだであとから来るのかしら」

こう思うのも心のうちだけで、うかりとしているお千代には言うてみようもなく、時々目をそらしてあとを見るけれど、それらしい人も見えない。ぶらぶら歩けばかえって体はだるい。

「おとよさん、もうわたし少しくたぶれたわ。そろで一休みしましょうか」

お千代の暢気は果てしがない。おとよの心は一足も早く妙泉寺へ行ってみたいのだ。

「でもお千代さんここは姫島のはずれですから、家いえの子こはすぐですよ。妙泉寺で待ち合わせるはずでしたねい」

「こういわれてようやくの事いくらか気がついてか、

「それじゃ少し急いでゆきましよう」

家の子村の妙泉寺はこの界限かいがいに名高き寺ながら、今は仁王門におうもんと本堂のみに、昔のおもかげを残して境内は塵ちりを払う人もない。ことに本堂は屋根の中ほど脱落して屋根地の竹が見えてる。二人が門へはいった時、省作はまだ二人の来たのも気づかず、しきりに本堂の周囲を見廻みまわし堂の様子を眺めておった。省作はもとより建築の事などに、それほどの知識があるのではないけれど、一種の趣味を持つている男だけに、一見してこの本堂の建築様式が、他に異なっているに心づき、思わず念がはいって見ておったのである。

「こんな立派な建築を雨晒あまざらしにして置くはひどいなあ、近郷に人のない証拠だ、この郡の恥辱だ、随分思い切ったもんだ、県庁あたりでもどうかしそうなもんだ、つまり千葉県人の恥辱だ、ひどいなあ」

省作はこんなことをひとりで言つて、待ち合わせる恋人がそこまで来たのも知らずにおつた。お千代が、ポンポンと手を叩くたた、省作は振り返つて出てくる。

「省さん、暢気のんきなふうをして何をそんなに見てるのさ」

「何さ立派なお堂があんまり荒れてるから」

「まあ暢気な人ねい、二人がさつきからここへきてるのに、ぼんやりして寺なんか見てい

て、二人の事なんか忘れっちゃっていたんだよ」

お千代は自分の暢気は分らなくとも省作の暢気は分るらしい。省作は緩ゆるかに笑いながら二人の所へきた。

思うこと多い時はかえって物はいえぬらしく、省作はおとよに物もいわない、おとよも顔にうるわしく笑ったきり省作に対して口はきかぬ。ただおとよが手に持つ傘かさを右に左にわけもなく持ち替えてるが目にとまった。なつかしいという形のない心は、お互いのことばによって疎通そつうせらるる場合が多いが、それは尋常の場合に属することであろう。

今省作とおとよとは逢あつても口をきかない。お千代が前にいるからというわけでもなく、お互いにすねてるわけでもない。物を言わなくとも満足ができたのである。なつかしいという形のない心が、ことばの便りたよをかららないで満足に抱合たがができたからである。

お千代と省作との間に待ったとか待たないとかいう罪のない押し問答がしばらく繰り返される。身を傾けるほどの思いはかえって口にも出さず、そんな埒うちもなき事をいうて時間を送る、恋はどこまでももどかしく心に任せぬものである。三人はここで握り飯の弁当を開いた。

十

「のろい足だなあ」と二、三度省作から小言^{ここと}が出て、午後の二時ごろ三人はようやく御^{おんじ}蛇^やが池^{いけ}へついた。飽き飽きするほど日のながいこの頃、物考えなどしてどうかすると午前か午後かを忘れる事がある。まだ熱さに苦しむというほどに至らぬ若葉の頃は、物参りには最も愉快な時である。三人一緒になつてから、おとよも省作も心の片方に落ちつきを得て、見るものが皆面白くなつてきた。おのずから浮き浮きしてきた。目下の満足が楽しく、遠い先の考えなどは無意識に腹の隅^{すみ}へ片寄せて置かれる事になつた。

これが省作おとよの二人^{ふたり}ばかりであつたらば、こうはゆかなかつたかもしれない。そこにお千代という、はさまりものがあつて、一方には邪魔なようなところもあるが、一面にはそれがためにうまく調子がとれて、極端に陥らなかつたため、思ったよりも今日の遊びが愉快になつた。初めはお千代の暢氣^{のんき}が目についたに、今は三人やや同じ程度に暢氣になつた。しかしながら省作おとよの二人には別に説明のできない愉快のあるはもちろんである。物の隅々^{たまたま}に溜^{たま}つていた塵屑^{ちりくず}を綺麗^{きれい}に掃き出して掃除^{そうじ}したように、手も足も頭もつかえて常に屈^{かが}まつてたものが、一切の障^{さわ}りがとれてのびのびとしたような感じに、今日ほど

気の晴れた事はなかった。

御蛇おんじやが池いけにはまだ鴨かもがいる。高部たかべや小鴨や大鴨も見える。冬から春までは幾千わかか判らぬほどいるそうだが、今日も何百というほど遊んでいる。池は五、六万坪あるだろう、ちよつと見渡したところかなり大きい湖水である。水も清く周囲の岡おかも若草の緑につつまれて美しい、渚なぎさには真菰まこもや葦あしが若々しき長き輪郭を池に作っている。平坦へいたんな北上きたかざ総さうにはとにかく遊ぶに足るの勝地である。鴨は真中まんなかほどから南の方、人のゆかれぬ岡の陰に集まつて何か聞きわけのつかぬ声で鳴きつつある。御蛇が池といえは名は怖ろしいが、むしろ女小児おんなこどもの遊ぶにもよろしき小湖に過ぎぬ。

湖畔の平地に三、四の草屋がある。中に水に臨んだ一小廬しょうろを湖月亭こげつていという。求むる人には席を貸すのだ。三人は東金とうがねより買い来たれる菓子果物くだものなど取り広げて湖面をながめつつ裏なく語らうのである。

七十ばかりな主あるしおきなの翁は若き男女のために、自分がこの地を銃獵禁制地に許可を得し事柄や、池の歴史、さては鴨獵の事など話し聞かせた。その中には面白き話もあった。

「水鳥のたぐいにも操みさおというものがあると見えまして、雌なり雄なりが一つとられますと、あとに残ったやもめ鳥でしょう、ほかの雌雄が組をなして楽しげに遊んでる中に、一つ淋さび

しく片寄つて哀れに鳴いてるのを見ることがあります。そういうことがおりおりありまして、あああれはつれあいをとられたのだなどということがすぐ分ります。感心なものでございます」

この話を聞いておとよも省作も涙の出でんばかりに感じたが、主が席を去るとおとよは堪^{たま}りかね、省作と自分とのこの先に苦勞の多かるべきをいい出^いでて嘆息する。お千代も省作に向つて、

「省さんも御承知ではありませんが、斎藤の一条から父はたいへんおとよさんを憎んで、いまだに充分お心が解けないもんですから、それはそれはおとよさんの苦勞心配は一通りの事ではなかつたのです。今だつて父の機嫌^{きげん}がなおつてはいないです。おとよさんもこんなに瘦^やせつちやつたんですから、かわいそうで見ていられないから、うちと相談してね、今日の事をたくらんだんです。随分あぶない話ですが、あんまりおとよさんがかわいそうですから、それですから省さん今夜は二人でよく相談してね、こうということをきめてください。おまえさんら二人の相談がこうときまれば、うちでも父へなんとか話のしようがあるというんですから、ねい省さん」

省作も話^{はなし}下手な口でこういった。

「お千代さん、いろいろ御親切に心配してくださって、いくらありがたく思ってるかしれやしません。私は晴れておとよさんの顔を見るのは四か月ぶりです。痩せた痩せたというけど、こんなに痩せたとは思わなかったです、さつき初めて妙泉寺で逢^あつて私は実際驚いた。私はもう五、六日のうちに東京へいくと決心したんです、お千代さんもおとよさんも安心してください、うちの兄はこういうんですから。」

省作、おとよさんはどういう気にいる、お前の決心はどうだ。おれの覚悟はいつかも話したように、ちゃんときまつてると。お前の決心一つでおれはいつでもえい。この間お祖母^かさんにも話しておいた。

それから私がこれこれだと話すと、うんそりやよかろう、若いものがうんと骨折るにや都会がえい、おれは面^{めん}目^{ぼく}だのなんぼくだのということは言わんがな、そりや東京の方が働きがいがあるさ。それじゃそうと決心して、なるだけ早く実行することにしろ。それからお前にいうておくことがある、おれにもたいした事はできんけれど、おれも村の奴^{やつ}らに欲が深い深いといわれたが、そのお蔭^{かげ}で五、六年丹^{たん}精^{せい}の結果が千五百円ばかりできて。これをお前にやる分にや先祖の財産へ手を付けんのだから、おれの勝手だ。お前もそんなもりでな、東京で何か仕事を覚えろ……おとよさんのおとツつさんが、むずかしい事をい

うのも、つまりわが子可愛さからの事に違いあんめいから、そりやそのうちどうにかなるよ、心配せんで着々実行にかかるさ。

兄はこう言うんですから、私の方は心配ないです。佐介さんにお千代さんから、よくそう申してください、おとツつさんの方も何分頼みます」

お千代は平生妹ながら何事も自分より上手と敬しておったおとよに對し、今日ばかりは眞の姉らしくあつたのが、無上に嬉しい。

「それではもうおとよさん安心だわ。これからはおとツつさん一人だけですから、うちでどうにか話するでしょう。今日はほんとに愉快であつたわねい」

「ほんとにお千代さん、おとツつさんをいつまでああして怒らしておくのは、わたしは何ほどつらいかしれないわ。おとツつさんの言う事にちつとも御無理はないんだから、どうかしておとツつさんの機嫌を直したい、わたしは……」

「そりや私だつておとよさんの苦心は充分察してるのさ」

省作はお千代とおとよの顔を見比べて、

「お千代さん、おとよさんは少し元のおとよさんと違ってきたね」

「どう違うの」

「元はもつと、きつぱりとしていて、今のように苦労性でなかったよ。近頃はばかに気が弱くなった、おとよさんは」

おとよは、長くはつきりした目に笑みを湛^たえてわきを見ている。

「それも省さんがあんまりおとよさんに苦労さしたからさ」

「そんな事はねい、私はいつでもおとよさんの言いなりだもの」

「まあ憎らしい、あんなこといつて」

「そんなら省さん、なで深田へ養子にいった」

お千代はこう言つてハハハハと笑う。

「それもおとよさんが行けつて言つたからさ」

「もうやめだやめだ、こんなこといつてると、鴨^{かも}に笑われる。おとよさん省さん、さあさ

あ蛇王様へ詣^{まい}つてきましよう」

三人はばたばた外へ出る。池の北側の小路^{こみちなぎさ}を渚^{なぎさ}について七、八町廻^{まわ}れば養安寺村である。追いつ追われつ、草花を採つたり小石を拾つて投げたり、蛇がいたと言つては三人がしがみ合つたりして、池の岸を廻つてゆく。

「省さん、蛇王様はなで輝^{あかぎれ}の神様でしょうか」

「なでだか神様のこたあ私にやわかんねい」

「それじゃ蛇王様は輝の事ばかり拝む神様かしら」

「そりや神様だもの、拝めば何でも御利益ごりやくがあるさ」

「なんでも手足がなおれば、足袋たびなり手袋なりこしらえて上げるんだそうよ、ねい省さん」

「さっきの爺さんじいはたいへん御利益があるつていったねい」

三人は罪のない話をしながらいつか蛇王だおうごんげん権現の前へくる。それでも三人はすこぶる真面目まじめに祈願をこめて再び池の囲りめぐを駆け廻りつつ愉快に愉快にとうとう日も横日よこびになった。

十一

東金町とうがねまちの中ほどから北後ろの岡おかへ、少しく経上へあがった所に一区をなせる勝地がある。

三方岡めぐを囲めぐらし、厚硝子ガラスの大鏡をほうり出したような三角形の小湖水を中にして、寺あり学校あり、農家も多く旅舎やじやもある。夕照りうらかな四囲の若葉をその水面に写し、湖心寂然として人世以外に別天地の意味を湛たたえている。

この小湖には俗な名がついている、俗な名を言えば清地を汚すの感がある。湖水を挟ん

で相對している二つの古刹こさつは、東岡なるを濟福寺とかいう。神々こうこうしい松杉の古樹、森高く立ちこめて、堂塔おおを掩おほうて尊い。

桑を摘んでか茶を摘んでか、箬ざるを抱かかえた男女三、四人、一隅いちぐうの森から現われて濟福寺の前へ降りてくる。

お千代は北の幸谷こうやなる里方へ帰り、省作とおとよは湖畔の一旅亭りよていに投宿したのである。首を振ることもできないように、身にさし迫つた苦しき問題に悩みつつあつた二人が、その悩みを忘れてここに一夕の緩和を得た。嵐あらしを免れて港に入りし船のごとく、激たぎつ早瀬の水が、僅わずかなる岩間の淀よどみに、余裕を示すがごとく、二人はここに一夕の余裕を得た。

余裕をもつて満たされたる人は、想おもうにかえつて余裕の趣味を解せぬのであらう。余裕なき境遇にある人が、僅かに余裕を発見した時に、初めて余裕の趣味を適切に感ずることができる。

一風呂ひとふろの浴ゆあみに二人は今日の疲れをいやし、二階の表に立つて、別天地の幽邃ゆうすいに対し、温良な青年清秀な佳人、今は決してあわれなかわいそうな二人ではない。

人は身に余裕を覚ゆる時、考えは必ずわれを離れる。

「おとよさんちよつとえい景色ねい、おりて見ましようか、向うの方からこつちを見たら、

またきつと面白いよ」

「そうですねい、わたしもそう思うわ、早くおりて見ましよう、日のくれないうちに」

おとよは金めつきの足に紅玉の玉をつけた釵かんざしをさし替え、帯締め直して手早く身繕いをする。ここへ二十七、八の太った女中が、茶具を持って上がってきた。茶代の礼をいうて
 町ていねい寧ねいにお辞儀じぎをする。

「出花でばなを入れ替えてまいりました、さあどうぞ……」

「あ、今おりて湖水のまわりを廻まわってくる」

「お二人でいらつしやいますの……そりやまあ」

女中は茶を注つぎながら、横目を働かして、おとよの容姿をみる。おとよは女中には目もくれず、甲斐絹裏かいきうらの、しやしやらする羽織はおりをとって省作に着せる。省作が下手へたに羽織ひもの紐を結べば、おとよは物も言わないで、その紐を結び直してやる。おとよは身のこなし、しとやかで品位がある。女中は感に堪たえてか、お愛想か、

「お羨うらやましいことねい」

「アハハハ、今日はそれでも、羨ましいなどといわれる身になったかな」

おとよは改めて自分から茶を省作に進め、自分も一つを啜すって二人はすぐに湖畔へおり

た。

「どっちからいこうか」

「どっちからでもおんなしでしょうが、日に向いては省さんいけないでしょう」

「そうそう、それじゃ西手からにしよう」

箱のようなきわめて小さな舟を岸から四、五間乗り出して、釣^つりを垂^たれていた三人の人がいつのまにかいなくなっていた。湖水は激^{さざなみ}も動かない。

二人がどうして一緒になろうかという問題を、しばらくあとに廻^{まわ}し、今二人は恋を命とせる途中で、恋を忘れた余裕に遊ぶ人となった。これを真の余裕というのかもしれない。二人はひよつと人間を脱^ぬけ出^いでて自然の中にはいった形である。

夕^{ゆうもや}靄の奥で人の騒ぐ声が聞こえ、物打つ音が聞こえる。里も若葉も総^{すべ}てがぼんやり色をばかし、冷やかな湖面は寂^{せき}寞^{ぼく}として夜を待つさまである。

「おとよさん面白かったねい、こんなふうな心持ちで遊んだのは、ほんとに久しぶりだ」

「ほんとに省さんわたしもそうだわ、今夜はなんだか、世間が広くなったような気がするのねい」

「そうさ、今まではお互いに自分で自分をもてあつかっていたんだもの、それを今は自分

の事は考えないで、何が面白いの、かにが面白いのって、世間の物を面白がってるんだもの。あ、宿であかしが点いた、おとさん急ごう」

恋は到底痴おろかなもの、少しささえられると、すぐ死にたき思いになる、少し満足すればすぐ総てを忘れる。思慮のある見識のある人でも一度恋に陥れば、痴態を免れ得ない。この夜二人はただ嬉うれしくて面白くて、将来の話などしないで寝てしまった。翌朝お千代が来た時までに、とにかく省作がまず一人で東京へ出ることこの月半つきなかに出立しゅったつするということだけきめた。おとよは省作を一人でやるか、自分も一緒に行くかということについて、早くから考えていたが、つまり二人で一緒に出ることは穏やかでないと思ひさだめたのである。

十二

はずれの旦那だんなという人は、おとよの母の従弟いとこであつて薊あざみという人だ。世話好きで話のうまいところから、よく人の仲裁などをやる。背の低い顔の丸い中ちゅうぶと太りの快活で物の解わかった人といわれてる。それで斎藤の一条以来、土屋の家では、例の親父おやじが怒おこって怒おこって始

末におえぬということを書いて、どうにか話をしてやりたく思つてゐるもの、おとよの一身に關することは、世間晴れての話でないから、親類とてめつたな話もできずにおつたところ、省作の家の人たちの心持ちがすっかり知れてみると、いつまでそうしては置けまいと、お千代がやきもきして佐介を薊の方へ頼みにやった。薊は早速その晩やつて来た。もとより親類ではあるし、親しい間柄だからまず酒という事になる。主人の親父とは頃合の飲み相手だ、薊は二つめにさされた杯を抑え、

「時に今日上^{きよう}がつたのは、少し願いがあつて来たわけじやから、あんまり酔わねいうちに話してしまふべい。おッ母^かさん、おッ母さん、あなたにもここさ来て聞いててもらふべい、お千代さん、ちよつとおッ母さんと呼んでください」

おとよの母はいろいろ御心配くだすつてと辞儀^{じぎ}をしてそこにすわる。

「御兩人の子についての話だから、御兩人の揃^{そろ}つた所でなけりや話はできない」

薊の話には工夫がある。男親一人にがんばらせないという底意を諷^{ふう}してかかる。

「時に土屋さん、今朝^{けさ}佐介さんからあらまし聞いたんだが、一体おとよさんをどうする気かね」

「どうもしやしない、親不孝な子を持つて世間へ顔出しもできなくなったから、少し小言^{ここと}

が長引いたまでだ。いや薊さん、どうもあなたに面目次第もない」

「土屋さんあなたは、よく理屈を言う人だから、薊も今夜は少し理屈を言おう。私は全体理屈は嫌いだが、相手が、理屈屋だから仕方がない。おッ母さんどうぞお酌を……私は今夜は話がつかねば喧嘩^{けんか}しても帰らねいつもりだからまあゆつくり話すべい」

片意地な土屋老人との話はせいてはだめだと薊は考えてるのだ。

「土屋さん、あなたが私に対して面目次第もないというのが、どうも私には解んねい。斎藤との縁談を断わったのが、なぜ面目ないのか、私は斎藤から頼まれて媒妁人^{なこうど}となったのだから、この縁談は実はまとめたかった。それでも当の本人が厭^{いや}だというなら、もうそれまでの話だ。断わるに不思議はない、そこに不面目もへちまもない」

「いや薊^{あざみ}、ただ斎藤へ断わっただけなら、決して面目ないとは思わない。ないしよ事の淫^い奔^{たずら}がとおって、立派な親の考えがとおせんから面目がない。あなたも知つてのとおり、あいつは親不孝な子ではなかったのだがの」

「少し待つてください。あなたは無造作に浮^{いたずら}奔^{たずら}だの親不孝だと言うが、そこがおれにや、やつぱり解^{わか}んねい。おとよさんがなで親不孝だ、おとよさんは今でも親孝行な人だ、私がそういうばかりではない、世間でもそういつてる。私の思うにやあなたがえつて子に不

孝だ」

「どこまでも我儘わがままをとおして親のいうことに逆らうやつが親不孝でないだろうか」

「親のいうことすなわち自分のいうことを、間違いないものと目安をきめてかかるのがそもそも大間違いのものだ。親のいうことにや、どこまでも逆らってならぬとは、孔子こうしまでもいつていないようだ。いくら親だからとて、その子の体まで親の料簡りょうけん次第にしようというは無理じゃねいか、まして男女間の事は親の威光でも強いられないものと、神代の昔から、百里隔ひゃくりてて立ち話いたずらのできる今日こんにちでも変らぬ自然おきての掟おきてだ」

「なによ、それが淫奔いたずら事ことでなけりや、それでもえいさ。淫奔いたずらをしておって我儘をとおすのだから不埒ふらちなのだ」

「まだあんな事を言ってる、理屈をいう人に似合わず解らない老人としよりだ。それだからあなたは子に不孝な人だというのだ。生きとし生けるもの子をかばわぬものはない、あなたにはわが子をかばうという料簡がないだなあ」

「そんな事はない」

「ないつつたつて、現にやってるじゃねいか。わが子をよく見ようとはしないで、悪く悪くと見てる、いわば自分の片意地な料簡から、おとよさんを強いて淫奔いたずらものにしてしまお

うとしてる、何という意地の悪い人だろう」

この一言には老人も少しまいった。たしかに腹ではまいっても、なるほどそうかとは、口が腐つてもいえない人だ。よほど困つたと見え、独りで酒を注いで飲む手が少し顫えてる。まあ一つといって盃を蕪にさす。

「そりや土屋さん、男女の關係ちは見ようによれば、みんな淫奔だよ、淫奔であるものもただ精神の一つにあるだよ。表面の事なんかどうでもえいや、つまらん事から無造作に料簡を動かして、出たり引つこんだりするのか淫奔の親方だよ。それから見るとおとよさんなんかは、こうと思ひ定めた人のために、どこまでも情を立てて、親に棄てられてもとまで覚悟してるんだから、實際妻にも話して感心していますよ」

「飛んでもない間違いだ」

老人は鼻汗いっぱいにかいた顔に苦しい笑いをもらした。おとよの母もここでちよつと口をあく。

「蕪さん、ほんとに家のおとよは今ではかわいそうですよ。どうかおとよさんの機嫌を直したいとばかりいつてます」

「ねいおツ母さん、小手の家では必ず省作に身上を持たせるといつてるそうだから、

ここは早く綺麗きれいに向うへくれるのさ。おツ母さんには御異存ごいぞんはないですな」

「はア、うちで承知しやうちさえすれば……」

「土屋さん、もう理屈は考えないで、私に任せてください。若夫婦はもちろんおツ母さんも御異存ごいぞんはない、すると老人一人で故障をいうことになる、そりやよくない、さあ綺麗に任してください」

老人はまた一人で酒を注ついで飲む、そうして薊さかすきに盃さかずきをさす。

「どうです土屋さん……省作に気に入らん所でもありませんか。なかには悪口あくぐちいうものもあるが、公平な目で見ればこの町村千何百戸のうちで省作ぐらい出来のえい若いものはねえ。そりや才のあるのも学のあるのもあろうけれど、出来のえい気に入った若いものといえ、あの男なんぞは申し分がない。深田でもたいへん惜しがって、省作が出たあとで大分だいぶん揉めたそう、親父おやじはなんでもかでも面倒を見ておけというのであったそう。それもこれつまりおとよさんのために、省作も深田にいなかったのだから、おとよさんが親すに棄てられてもと覚悟したのは決して浮気うたがな沙汰さたではない。現に斎藤さいとうでさえ、わたしがこの間、逢あつたら、

いや腹立つどころではない、僕も一人には死なれ一人には去られ、こうと思ひこんで来

てくれる女がほしいと思つていたところでしたから、かえつておとよさんの精神には真から敬服しています。

「どうです、それを面目ないの淫^{いたずら}奔^はだのつて、現在の親がわが子の悪口をいうたあ、随分無慈悲な親もあればあつたもんだ。いや土屋、悪くはとるな」

薊はことばを尽くし終わつて老人の顔を見ている。煙草^{たばこ}を一服吸う。老人は一言も答えぬ。

「どうです、まだ任せられませんか、もう理屈は尽きてるから、理屈は抜きにして、それでも親の掟^{おきて}に協^{かな}わらない子だから捨てるというなら、この薊に拾わしてください。さあ土屋さん、何とかいうてください」

「いや薊さん、それほどいうなら任せよう。たしかに任せるから、親の顔に対して少し筋道を立ててもらいたい」

「困つたなあ、どんな筋道か知らねいが、真の親子の間で、そんなむずかしい事をいわないで、どうぞ土屋さん、何にもなしに綺麗^{きれい}に任せてください。おとよさんにあやまらせろというなら、どのようにもあやまらしよう」

「どうか旦那^{だんな}、もう堪^{かん}忍^{にん}してやつてください」

「てめいが何を知る、黙つてろ」

薊あざみも長い間の押し問答の、石に釘打くぎつような不快にさつきからよほど劫げうが沸いてきてる。もどかしくて堪らず、酔った酒も醒さめてしまつてゐる。

「どうでも土屋さん、もうえい加減にうんといつてください。一体筋道とはどういう事です」

「筋道は筋道さ、親の顔が立ちさえすればえい。親の理屈を丸つぶしにして、子の我儘わがままをとおすことは……」

薊の顔は見る見る變つてきた。灰吹きを叩たたく音も際立きわつて高い。しばらく身をそらして老人を見おろしていたが、

「ウム自分の顔の事ばかりいつてゐる。おれの顔はどうする、この薊の顔はどうするつもりだ。勝手にしろ、おツ母さん、とんだお邪魔をしました」

薊は身を翻ひるがえして降り口へ出る、母はあとからすがりつく、お千代も泣きつく。おとよは隣座敷にすすり泣きしている。薊はちよつと中ちゆうもじど戻りしたが、

「帰りがけに今一言いつておく。親類も糞くそもあるもんか、懇意も糸瓜へちまもねいや、えい加減に勝手をいえ、今日限りだ、もうこんな家なんぞへ来るもんか」

薊は手荒く抑える人を押し退けて降りかける。

「薊さんそれでは困る、どうかまあ怒らないでください。とよが事はとにかく、どうぞ心持ちを直して帰ってください」

お千代はただしがみついて離さない。薊はようやく再び座に返った、老人は薊を見上げて、

「ばかに怒ったな」

「おらも喧嘩に來たんじやないから、歸られるようにして歸せ」

薊の狂言はすこぶるうまかった、とうとう話はきまった。おとよは省作のために二年の間待つてゐる、二年たつて省作が家を持てなければ、その時はおとよはもう父の心のままになる、決して我意をいわない、と父の書いた書付へ、おとよは爪印を押して、再び酒の飲み直しとなった。俄かに家内の様子が變る、祭りと正月が一度に來たようであつた。

十三

薊が一切を呑み込んで話は無造作にまとまる。二人を結婚さしておいて、省作を東京へ

やつてもよいが、どうせ一緒にいないのだから、清六の前も遠慮して、家を持ってから東京で祝儀しゅうぎをやるがよからうということになる。佐介さすけも一夜省作の家を訪とうて、そのいさくさなしの氣質を丸出しにして、省作の兄と二人で二升の酒を尽くし、おはまを相手に踊りまでおどった。兄は佐介の元気を愛して大いに話し口が合う。

「あなたのおとツつさんが、いくらやかましくいつても、二人を分けることはできないさ。いよいよ聞かなけりや、おとさんを盗んじまうまでだ。大きな人間ばかりは騙かたり取つても盗み取つても罪にならないからなあ」

「や、親父おやじもちよつと片意地の弦がはずれちまえばあとはやっぱいいさくさなしさ。なんでもこんごろはおかしいほどおとよと話がもてるちこつたハハハハハ」

佐介がハハハハハと笑う声は、耳の底に響くように聞える。省作は夜の十二時頃酔った佐介を成東なるとうへ送りとどけた。

省作は出立前十日ばかり大抵土屋の家に泊まった。おとよの父も一度省作に逢あつてからは、大の省作好きになる。無論おとよも可愛かわゆくてならなくなつた。あんまり変りようが烈はげしいので家のものに笑われてるくらいだ。

*

*

*

*

省作は田植え前蚕かいこの盛りという故郷の夏をあとにして成東から汽車に乗る。土屋の方からは、おとよの父とおとよとが来る。小手の方からは省作の母が孫二人をつれ、おはまも風呂敷包みふろしきづつを持って送ってきた。おとよはもちろん千葉まで同行して送るつもりであったが、汽車が動き出すと、おはまはかねて切符を買っていたとみえしやにむに乗り込んでしまった。

汽車が日向駅ひやうがを過ぎて、八街やちまたに着かんとする頃から、おはまは泣き出し、自分でも自分が抑えられないさまに、あたり憚はばからず泣くのである。これには省作もおとよもほとんど手に余ってしまった。なぜそんなに泣くかといってみても、もとより答えられる次第のものではない。もっともおはまは、出立という前の夜に、省作の居間にはいつてきて、一心こめた面持ちおももに、

「省さんが東京へ行くならぜひわたしも一緒に東京へ連れていつてください」というのであった、省作は無造作に、

「ウムおれが身しんしやう上持つまで待て、身上持てばきつと連れていつてやる」

おはまはそのまま引き下がったけれど、どうもその時も泣いたようであった。おはまの

そぶりについて省作もいくらか、気づいておったのだけれど、どうもしょうのない事であるから、おとよにも話さず、そのままにしていたのだが、いよいよという今日になってこの悲劇を演じてしまった。

「あんまり人さまの前が悪いから、おはまさんどうぞ少し静かにしてください」

強くおとよにいわれて、おはまは両手の袖そでを口に当てて強しいて声を出すまいとする。抑おさえても抑え切れぬ悲痛の泣き音は、かすかなだけかえって悲しみが深い。省作はその不束ふつつを咎とがむる思いより、不愍ふびんに思う心の方が強い。おとよの心には多少の疑念があるだけ、直ちにおはまに同情はしないものの、真に悲しいおはまの泣き音に動かされずにはいられない。仕方がないから、佐倉さくらへ降りる。

奥深い旅宿の一室を借りて三人は次ぎの発車まで休息することにした。おはまは二人の前にひれふしてひたすらに詫わびる。

「わたしはこんなことをするつもりではなかったのであります、思わず識しらずこんな不束ふつつなまねをして、まことに申しわけがありません。おとよさんどうぞ気を悪くしないでください」

というのである、おはまは十三の春から省作の家において、足掛け四年間のなじみ、朝夕隔

てなく無邪氣に暮して来たのである。おはまは及ばぬ事と思いつつも、いつとなし自分でも判^{わか}らぬまに、省作を思うようになった。しかしながら自分の姉ともかしくおとよという人のある省作に対し、決してとりとめた考えがあつたわけではない。ただ急に別れるが悲しさに、われ識^しらずこの不束を演じたのだ。

もとから気の優しい省作は、おはまの心根を察してやれば不愜で不愜で堪^{たま}らない。さりとておとよにあられもない疑いをかけられるも苦しいから、

「おとよさん決して疑つてくれな、おはまには神かけて罪はないです。こんなつまらん事をしてくれたものの、なんだか私はかわいそうでならない。私のいないあとでも決して気を悪くせず、おはまにはこれまでのとおり目をかけてやってください」

おとよはもうおはまを抱いて泣いてる。わが玉の緒の断えんばかり悲しい時に命の杖^{つえ}とすがつた事のあるおはまである。ほかの事ならばわが身の一部をさいても慰めてやらねばならないおはまだ。

おはまの悲しみのゆえんを知つたおとよの悲しみは小説書くものの筆にも書いてみようがない。

三人は再び汽車に乗る、省作は何かおはまにやりたいと思いついた。

「おとよさん、私は何かはまにやりたいが、何がよろう」

「そうですねい……そうそう時計をおやんなさい」

「なるほど私は東京へゆけば時計はいらない、これは小形だから女の持つにもえい」
「駅夫が千葉千葉と呼ぶ。二人は今さらにうるたえる。省作はきつとなつて、

「二人はここで降りるんだ」

青空文庫情報

底本：「野菊の墓」集英社文庫、集英社

1991（平成3）年6月25日第1刷

2007（平成19）年3月25日第4刷

初出：「ホトトギス」

1908（明治41）年4月号

入力：林 幸雄

校正：川山隆

ファイル作成：

2008年10月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春の潮

伊藤左千夫

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>